

●清朝の雲南支配強化に伴う亡国、そして改宗、タイ国移住といった歴史的経験を通し、ラフの人々の得た救済観や民族・国家観。民族とは何か、に鋭く迫る論考。

タイ山地一神教徒の民族誌

——キリスト教徒ラフの国家・民族・文化

片岡 樹著

ここで想起されたいのは、本書での事例の場合、キリスト教への集団改宗運動は宣教師の思惑と無関係なところで発生しているという点である。ラフの初期集団改宗の特徴とはまさに、布教する者とされる者のあいだで、互いに話がかみ合わないまま、事態が劇的に進展していった点にある。これを改宗する側の立場からみれば、三仏祖の予言に弥勒下生を期待し、「白い人」や「白い本」をその予言の成就と受け入れたところ、「近代性への改宗」に同意したということになってしまったわけである。その結果としてもたらされたものが、本書の前半で検討した一連の展開である。

右に見たような合理化過程が、こうしたすれ違いを含みながら進められてきたのだとすれば、そこからこぼれ落ちていく要素にも着目する必要がある。キリスト教徒の実践レベルにおいて見出される「信仰の干満」というのが、まさにそうした予定調和の合理化図式からこぼれ落ちる側面にほかならない。

そのうちでも呪術主義あるいは神強制への傾斜（「干」は、民間信仰の領域とキリスト教の語彙体系との調整をめぐって展開される。第六章でみたように、それは民間信仰を「非宗教」と規定することで消極的に公認してしまう例や、その逆に民間信仰の要素をキリスト教のグシャの属性に吸収することで神強制もが持ち込まれてしまう例、あるいは在来諸精霊の悪魔への降格が結果的に災因としての精霊を存続させてしまう例などである。……）

呪術主義や神強制への退行の対極にあるのが、カリスマ主義への傾斜（「満」）である。これは一神教教義の客体化や脱呪術化を伴うという意味ではいわゆる合理化に近いが、しかしそれは「合理化」ハードな民族」とは正反對の帰結をもたらす。ここで興味深いのは、唯一神への帰依や「信仰による救済」といった主題の徹底こそがその契機となる点である。……（結論より）

まえがき 凡例

第一章 「一神教徒の視点から」の文化理解

一 非西洋キリスト教徒への人類学的アプローチ
二 信仰の干満と地上の文化
三 ラフについて

第二章 国家のはざままで——歴史的背景

一 「ラフの国」と近代国家
二 流浪の民族史
三 タイ国に裏口から入る

第三章 ラフ宗教史にみる「信仰の干満」

一 「一神教的アニミズム」
二 三仏祖の後継者たち
三 カリスマの伸縮

第四章 「亡国の民」の形成

一 亡国と零落の神話
二 多民族共同体としての「ラフの国」
三 「我々ラフの国」の回復へ

第五章 「ラフであること」をめぐって

一 慣習と血縁
二 キリスト教は「ラフの慣習」か？
三 キリスト教は民族境界か？

第六章 合理化と平信徒

一 「宗教」と「非宗教」の競合
二 多忙なる神
三 遍在する悪魔

第七章 耐え難いこの世を生きる

一 無知こそ力なり
二 受難の民の十二月
三 理想秩序を求めて

第八章 現代タイ国とラフ

一 「国民」の再定義と山地民
二 「異教徒のカエサル」の国で
三 孤児がジヨモになる日まで

第九章

結論
一 近代国家の成立と民族集団の再編
二 合理性の周縁
三 彼岸と此岸

索引

体裁

・A5判・上製カバー

・三六〇頁

税込み定価

・六三〇〇円

(本体六〇〇〇円)

注文書	
流通センター取扱品	
発売	風響社 TEL: 03-3828-9249
税込み	六三〇〇円
部	

地方出版

片岡 樹著

タイ山地一神教徒の民族誌

キリスト教徒ラフの国家・民族・文化

ISBN978-4-89489-111-1 C3039 ¥6000E

〔お客様控え〕

ご氏名
ご住所

お電話

月 日

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一-149
電話〇三(三八二八)九二四九
http://www.fukyo.co.jp